
無敵スライム

算裏 友城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無敵スライム

【Nコード】

N2004X

【作者名】

算裏 友城

【あらすじ】

最弱のモンスターはなんだろう？ その問いかけに人々が声を揃え答えるのは、決まってこう、“スライム”だ。

だが、もしも最弱代表たるスライムが最強の力を持っていたとしたら……。

「無敵シリーズ第四弾、無敵スライム、開幕！」

第一ゲル 無敵S VS パーティー昇龍のリーダー

この世界において、“最弱モンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

ある酒場にて一つのパーティーからあがった、ツマミついでの議題である。

彼らはどうやら難所とされるダンジョンを攻略し、上機嫌で打ち上げをしていて初心者語りから派生して来た話らしい。

リーダー格の熊を思わせる隻眼の大男が、“俺の前ではモンスターなど等しく雑魚だ”等と酒のせいもあり大きく出れば、切り込み隊長の剣士が“最弱つつたらポーツつつ立ってるだけのナマケモンキーだろ”と言う。

しかしすかさず賢者が、いや、と否定し“自分的にはウォルオウイプスの類いだ”と述べる。最後に女魔法使いが“デッドリーフに決まってるじゃない”と反論した。

「何言っただよお前ら、ナマケモンキーはな、攻撃を受けない限り何もしてこないだろうが！ 急所を一突きだね。間違いなく奴だ！」

「しかしですね、仕損じれば手痛い反撃がありますよ。群れていようものなら中級者と言えどてこずる恐れがあります。その点、初歩的な浄化術で簡単に駆逐出来るウォルオウイプスこそ最弱かと」

「オバケ嫌いな人はどうなのよ！ デッドリーフなら、枯れてる

しちよつとした炎で凄く燃えちゃうのよ。アイツでしょ？」

ヒートアップする議論。このまま閉店まで騒がれてもたまらぬリーダーは、まあまあ待て待て、と皆を諫めつつ言う。

「おめえらはな、自分の立場でモノを言い過ぎなんだよ。よおく考えてみるや……動きが鈍く、痛えのもなく、群れず、駆逐も容易で魔法もよく効く、そんな雑魚中の雑魚がいるじゃねえか」

「おいおいリーダー、俺は敢えてそいつを避けてたんだぜ？ どんな初心者でもそいつは倒せらあ」

「右に同じく。下手をすれば私の息子でも倒せるでしょうね。因みに今年で六つですが」

「えつ、えつ、何？ そんなの居たっけ？」

未だ気付かぬ勘の悪い魔法使いに、賢者はそつと耳打ちをした。

ああ、と得心のいった表情を浮かべる魔法使い。そして皆はいつせーの、せでモンスター名を叫んだ。

「……スライム！」

と。スライムとは、最早冒険者らにとって周知のお馴染み最弱モンスターである。

大概は大きさにして二十から三十カラム前後（約二十から三十七

ンチ)、子供の蹴球遊びに使用されるボールよりも一回りから二回り位大きい程。

地方によって違いはあるがゼリー状で非常に軟らかく、海水の様に無色透明に微かに青みを含ませた色合いのモンスターである。

よく、打撃や剣はその性質やイメージから通用しにくい、と言われるが実際には水分を内包している表皮を破つてしまえば勝手に崩壊する……そんな程度のキングオブザコ。

子供がボール代わりに蹴っていたら死んだ、とかの話も有名でよく聞く。

生まれ変わりたくない生物ランキングでは、恐らくダントツの一位を飾るであろう気の毒な生き物である。

だが……これから先そんな認識が通用しなくなる事を、誰も知らなかった……。

あれは酒場の閉店間際。例の四人パーティーが店から出て宿へと向かっている頃だった。

彼らが宿泊するのは、ガロスの宿。初級冒険者らはテントの中から眺め、中級冒険者は財布を見て諦める、そんな宿である。

賢者に肩を支えられフラフラとおぼつかない足取りで歩く剣士。妙なテンションで奇妙な歌を口ずさみ魔法使い。

そしてリーダーといえば“ちょっと小便に行つて来る。”と言い、

あるうことか町外れの草むらへと走って行ってしまったのだ。

これまた陽気に故郷の歌を口ずさみならぬ鼻ずさみ、丁度背高なフレリーフの木の裏へと回り込む。さて、用を足そうかと思つたその時であつた。

ガサツ、と草むらが揺れ動く。

「!？」

が、彼は腐つてもパーティー“昇龍”のリーダーであり、この道二十ウン年のベテランである。

即座に視線を音の方向へ向け、付近に耳をすませ迎撃体勢をとつた。流れる様な一挙一動に隙はない。

物音の正体は直感的にモンスターである、と認識。彼はあれこれと既に思考を巡らせていた。

町のそばだからと完全に油断していた。武器は宿に預けていて手元がない。この辺りならばウルフか、あるいはポイズンスネークか……いずれにしる素手でやり合えるか？ 酔いが回っているし……。

ガサ、ガサと草むらは不気味に揺れ、敵の接近を伝える。僅かな洩れ灯りを頼りに彼はその方向をじいつ、と凝視した。

それは思つたよりも小さくて……。

「えつ……？」

子供の遊具を二回りも大きくした、球状の、きらきらと僅かな光を弾くボディ。彼は途端に緊張状態から解かれた。

「ナンだよ……スライムじゃねえか！」

大方道に迷ったのか、たまたま街の近くに現れたのだろう。取り立てて珍しい事でもない。

さて正体も分かったところで、一瞬でも自分を恐怖させたちっぽけなそれを、リーダーは許す事が出来なかった。

。。。そうだ蹴りでもくれてやろう、そう思い再び雑魚を視界に収め……。

(あん？ どこ行った……?)

しかしスライムは忽然と姿を消した。いや、違う、正確にはリーダーの背後に素早く回り込んでいたのだ。

ベチャアアアア！

「ぐうあああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

パーティー昇龍のリーダー、ブレットに勝利した。

……翌日、ブレットは瀕死の状態で見られ、教会の世話になっ
たという。

彼は、何に襲われたのかを、誰にも語る事はなかった。

第二ゲル 無敵S VS 新人パーティーひまわり(戦士Lv:1 x 2)

「な、なあ、ボクたち だいじょうぶだよな？」

ひまわりの リーダーは いった。

「だ、だいじょうぶさ たびだつまえに かわのよろい をかっ
ただろ？」

ガサツ……

「ひっ モ、モンスター!？」

モンスター スライムがあらわれた

「な、なんだよ スライムじゃないか こんなやつ さっさと…
…」

バシッ! ピシヤッ!

「「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああー!？」」

パーティーひまわり にしょうりした。

第五ゲル 無敵S VS なりたて拳士ダベツカ (拳士Lv・4)

「よしっ あといつたいだ あといつたいたおせば ゴールドが
たりて あたらしいグローブ かえる！」

ガサツ……

「きたああああ かねをだせええええ！」

モンスター スライムがあらわれた

「ウソだろっ！？ いつせんにも ならない……」

グバツ！

「う、ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

けんしダベツカに しょうりした

第六ゲル 無敵S VS 商人見習いシンゴ (商人Lv・5)

「まったく はやくほかのメンバーを あつめないと そざいも
あんしんして ちょうたつできません」

ガサツ……

「なつ モンスターですか！ ここは けむりだままでにげ……」

モンスター スライムがあらわれた

「ああ、なんだ おどろかさないでくださ……」

ビチャアアッ！

「なんですとオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オー!？」

しょうにんみならい シンゴに しょうりした

第七ゲル 無敵S VS 迷子勇者セイン (勇者Lv.???)

「うーん あくましてんのうを けちらしたはいいんだけど
…ここどこだ？」

ガサツ…

「!?!? そこだ!」

セインは ドラゴンスライサーを はなつた

ズバツ!

モンスター スライムは まつぶたつになつた

「っと スライムだったのか ごめんな ものすごい さっきを
かんじたから …… って、スライム!? まさか ボクのごきょう
ちかくまで もどつてしまったのか!？」

セインは あわて はしりさつた

ズル…ズル…

ピチュッ…

スライムは くつついて さいせいした

スライムがあらわれた

「どりゃあ！」

バシヤ……

スライムがあらわれた

「ぬオオオ！」

ベジヤ……

「おい ……リーダーさ なんでスライムばっか かってんの？」

「このあいだの いっけんいらいですね」

「あんがいおっちゃん スライムに やられたんだったりしてー」

ガサツ……

スライムが あらわれた

「きさままで　ううたいめだ　かく」オオー！

バシィッ！

「ぎゃあああああああああああー！？」

ブレッドに　しょくりした

「「「リーダーー！？」」」

「なんだコイツ リーダーを いちげきで！」

「ただの スライムでは ありません ステータスじょうぼうが
いっちしない」

「おっちゃんを よくも！」

「くらええええ！」

じゅうけんしは マグナスラッシュを はなつた

「しかたありませんね！」

けんじやは スターライトを しようした

「わがほのおよ てきをやきつくせ！」

ほのおのまほうつかいは プロミネンスを しようした

ビシッ ドカッ ベチャ

「ぐあ ああ………」

「ばかな………」

「こんなことって……」

パーティー昇龍に しょうりした

第十二ゲル 無敵S VS パーティアサシニアサルトのリーダー

「それじゃ……我らの功績を讃え……乾杯……」

それはまるで、絶望の最中執り行われた最後の晩餐の様であった。

もしくは雰囲気だけなら明日、魔王がやってくる辺境の村のそれだ……パーティー“アサシニアサルト”の打ち上げ会は。

「肉……うまい……」

「魚も……いい……」

ロボットの品評会か、あるいは狂信的儀式……さかも皆の格好が漆黒のコートであったり、深い帽子着用であったり……目と鼻元以外は徹底的に晒していない出で立ちが尚、不気味さを強調していた。

「……この度は……襲撃人数百人……達成……めでたい……」

リーダーのアサシンは、皆に対し虫の羽音程の声でボソボソと言った。

「おめでとう……」

「おめでとう……」

「めでたい……」

残りの仕事人三名が同じく呟く。

「だがしかあし！ ……ゴホン ……ゴメン、興奮し過ぎた ……
我々以上に ……襲撃を成功させているパーティーは ……まだまだ居
るだろう ……そこで ……明日から ……クイクス大陸に ……向かう ……
…」

「クイクスに！？ ……ごめん ……キャラ作り、キャラ作り
…」

「我らは ……次のランクに ……進むべき。それに ……ここでは ……
…名を知られ過ぎたし ……潮時だと思う ……」

「確かに ……そうだ ……」

「俺は ……子供に石を ……投げられた ……」

「まだいい ……ワタシは問答無用で ……切り掛かれた ……」

彼らの言うように、パーティー“アサシンアサルト”の悪名は、
あまりに知られ過ぎてしまった。

基本的な活動といえば、汚い金持つ貴族やぼったくり商人などを
ターゲットに襲撃を繰り返し、金品強奪あるいは暗殺を行うという
内容だ。

だが、それはれっきとした犯罪であるし悪の行いである。無論そ
んな彼らに対しては非難の声の方が大きい。敵の方が遥かに多いの
である。

何故四人が汚名を着てまでこの道を突き進むのか……それは本人ら以外は誰も知り得ない事だろう。

さて、話を戻すが、実は彼らが九十九人目と百人目に選んでしまったターゲット……それがどうやら予想以上の有力者であった為に、名は派手に売れてしまい挙げ句大量の追っ手が投入されてしまったのだ。

そしてリーダーの発言、それは国外逃亡の意味を含んでいる。皆も無論、承知であったが口には出さなかった。

「だけど……それでも、それでも、我々は続けなければならない！ いつの日か我らの流した血が汗が、清浄なる世界へと繋がらん事を夢に見ながら！」

「『リーダー！ キャラ、キャラ！』」

「あ……うん、ごめん……とにかく……打ち上げはここまで……明日の、準備しよ……」

「あの……」

「まだ一杯しか……」

「いやむしろ一杯も……飲んでないけど……」

「あ……」

打ち上げは再開された。

「他に何……頼む……？」

・

「皆……お腹いっぱいになっただ？」

「うん……」

「はい……」

「ええ……」

「じゃあ……こっそり、帰ろう……さらば……」

「「「さらば」「」」

四人はそれぞれ別々の方角に消えていった。内、リーダーは北の方角へ茂みに紛れ走り抜けてゆく。

速度を保っているにも関わらず、夜の静寂は乱れもしていない。が、その時だ、背後に何かを感じたのは。

（何か……居る？）

自分の後ろを影のようにへばりつき追って来る何か、確かに居る。

(なら……)

と、リーダーは年寄りの木々に目を付けると、なんと幹を駆け登り、枝のしなりを利用して跳躍。

背高な木々を見下ろしつつ、クナイを取り出すと気配目がけ投てきした。四本四本、計八本のクナイが降り注ぎ、確かにその何かへ二発が命中した。

クルクル回転、その後音なく着地を決めると、リーダーは慎重に着弾地点へと向かった。

転がっているのは亡骸か、あるいは……だが、そこにあったのは、何と切り株であった。

「なっ……か、変わり身だと!？」

ガサッ……

「しまっ……!？」

モンスター　スライムがあらわれた

「えっ……?」

ばしいいっ!

「きゃあああああああああああああああああああー!」
「?」

アサシンアサルト リーダー クリスにしようりした

第十四ゲル 無敵S VS 速射ちガット (銃士LV・11)

「ふん どんなモンスターも おれの はやうちには かなわな
いぜ」

ガサツ……

「ん、そこだあぁ！」

ガットは はやうちを しようし……

ベチヤア！

「な、おれよりはやいだとオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

モンスター スライムがあらわれた

ガットに しょうりした

「ちょ、ちよっとまって おいてかないでよ!」

「うるさいな なら そのにもつを へらせよ」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「このにもつは わたしのせんりひんなの ひとつたりとも
ばなせるわけないでしょ!」

「ならあしをひっぱるな はやくあるけ ペースをみだすな」

「なによー!」

「なんだよ!」

バチイッ ベジヤッ

「「ギゃあああああああああああああああああああああ
ー!?!」」

パーティー 美女とケダモノ にしよつりした

「ようしよし レベルもあがったし これでおまえも りっぱな
ビーストテイマーだ」

「ありがとうございます これでボクも……」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「むっ ちょうどいい あのスライムを なかまにしてみる」

「はい！ えつとまずは エサをなげて……」

バチイン！

「うわあああああああああ！？」

「なんだと!？」

ビチャアツ！

「ぐあああああああああああああ！？」

ビーストテイマー師匠と弟子に しょうりした

第十七ゲル 無敵S VS 買い物帰りの少年 (一般人)

「はあ はあ はやくかえらないと くらくなっちゃう」

ガサツ……

「うっ……モ、モンスター!？」

モンスター スライムがあらわれた

(モンスターにであつたら しずかに しずかに……)

バサツ!

モンスター ウルフがはいごからきしゅうを しかけてきた

「!？」

ドスツ!

「きゃいいいいいいいいいん!？」

モンスター ウルフにしょうりした

ガサツ……

スライムは さつていった

「いったい なにがおきたの……？」

しょうねんは ぼつぜんと たちつくした

ドカツ

「グオオオオオオ！」

モンスター ギガベアーにしょうりした

「よし いらいたっせいだ さっさとかえって ほっしゅつにあ
りつくか」

ガサツ……

「ん なんだ？」

モンスター スライムが あらわれた

「スライム……？ よし ついでだし たおしてやる……」

バシィ！

「ぐう あああ！？」

クリフに しょうりした

「う、そだ……おまえは いったい……」

バシィィィィッ！

「ぎゃああああああああああああああああああー!?!」

クリフに しょうりした

あああああああー!?!「「

パーティー デュアルにしようとした

第二十一ゲル 無敵S VS ベテランパーティー昇龍リーダー ブレッド

「ふう きょうはここで のじゅくだな」

「そうですね テントは わたしが はりましよう」

「ごはんは わたしつくる！ ……ところで リーダーは？」

「あっちで すぶりしてるよ ……よほど くやしかったみたい
だな」

「ふんっ」

ブン

「ふんっ！」

ブン

「はああっ！」

ビュン

「うおおおおお！」

ガサツ……

「でたな　そこかあああああ！」

ドスツ！

「ぎゃあああああああああああああああああー!?!」

パーティー昇龍リーダー　ブレットに　しょつりした

第二十三ゲル 無敵S VS 分かれ道の案内人 (Lv・6)

「さあ あなたは みぎとひだり どちらのみに いきますか
」？」

「うーん ……みぎだ！ みぎにいく」

「みぎですね では おきをつけて……」

おとこは みぎのみちへと すすんだ

(どちらにすすもつが あのよいき ですね)

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「スライムですか あなたは どちらのみちへ？」

ベチャアツ！

「ぐうあああああああああああああああああああああああ
あ！？」

あんないにんに しょうりした

スライムは ちよくしんした

「もうおわりか？ チームサファイア」

「ぐ おのれ こんなところで ぜんめつしてしまうのか」

「そうだ せめてやすらかに ……きえてしまえ！」

モンスター レッサーデモンは デスフレイムをしようした

ガサツ……

スライムがあらわ……

ドンツ！

「なっ ス、スライムだと!? じゃまをするな」

「!?!? すきありいい!」

ズバツ！

「ばかな そんなことがあぁ!?」

レッサーデモンに しょうりした

「かった……のか？」

ズドッ！

「ぎゃあああああああ！？」

瀕死パーティーー サファイアは 全滅した

第二十七ゲル 無敵S VS 迷子勇者セイン2 (勇者Lv.???)

「いくらあるいても でくちがない ……さては てきのようじ
ゆつか!?!」

ガサツ……

「!?!? あまい そこだ!」

セインは ソニックカッターツヴァイを しようした

ズバアッ!!

モンスター スライムは バラバラになった

「あつ またスライムだったのか ……ものすごい さっきをか
んじたと おもったのに ホントにごめんな」

セインは さきをいそいだ

ズル……ピチ、ピチ……

スライムは くつつきさいせいした

「……………」

スライムは セインのすがたを きおくした

第二十八ゲル 無敵S VS 呪咀吐きアン (呪術師Lv・41)

「ああ …… にくい にくたらしい」

ガサツ……

モンスター スライムが あらわれた

「ああ にくい くるおいしいほどにくい！ いのちとひきかえに
しても おしくないほどにくい！ にくいにくいにくいにくいにくいにくい
にくい！」

ベシッ！

「おおのれええええええええええ おまえもにくいイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ
イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

呪咀吐きアンに しょうりした

第二十九ゲル 無敵S VS 賞金稼ぎライル (ソードマスターLv・99)

「わたしに かてるわけ ないだろう!」

モンスターの むねにしょうりした

「きわめにきわめた わがけんじゅつ もはや このよに てきはない!」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「きたな ……スライムのばけもの!」

ライルは ヘイズスライサーを はなつた

ズバツ!

スライムは バラバラになった

「ちがったか ……うわさの むてきスライムとは いったい…
…」

ズルズル……

「むっ? こいつまだ……」

スライムは　メタモルフォーゼを　しようした

「なっ……？」

勇者セインスライムが　あらわれた

第三十一ゲル 無敵S VS 討伐依頼

【重要依頼】

“スライム”一匹の捕獲、もしくは討伐。

【依頼内容】

上記の通り、スライム二匹の捕獲、もしくは討伐を願います。但し、突然変異体と思しき異常な能力を持つ個体に限りません。出来得る限り生け捕りにし、依頼主の元へ運搬して頂ければ有難いです。

【依頼達成報酬】

捕獲……二千万エン

討伐……五百万エン

【依頼主】

ギルドNo.4649 パーティー昇龍

「おいおい ……なんだこの ぼうけんしゃを バカにしたよう

な いらいは

「しかもパーティー昇龍のいらいだと？ スライムのいつびきもたおせないのかよ？」

そのとき ひとりのおとこが ギルドにあらわれた

「ん？ あいつは ライルじゃないか？」

「ほんとだ あのとんさいけんしか …… ボロボロみたいだがまおつにでも いどんだか？」

「よおライル どうしたおまえらしくねえ だれにやられた？」

「……スライム……」

「えっ……！？」

「わたしはスライムに まけたんだ！ おいギルドマスター、パーティー昇龍につたえておけ、二千万では わりにあわないとな！」

「な……し、しょうきかライル？」

「ああ、わたしはしょうきだ！ ほかくなんぞも できそうにな
い 五千万だ とうばつに 五千万よういしろ！」

ライルはいつものさけをのみほして でていった

「……おいおいおい べつやらのいらいは……」

「おおあな らしいな」

ぼっけんしゃらの めのいろが かわった

第三十二話 無敵S VS 女魔王カルミンツァー (魔王Lv.???)

「うふふふ できた」

カルミンツァーは ばらのはなを まんぞくそうにみおろした

「ああ ゆうしゃセインは まだここにこないのかしら ここで
はやく …… かねにあいたいわ」

ガサツ……

「!?!? だれっ!?!?」

カルミンツァーは デイメンジョンシュートを しょうした

ぐばあっ!

モンスター スライムは じくうのはぎまに たたきこまれ し
ようめつした

「……………スライム? ここまで スライムがはいつてきたの? け
いびは いったいなにを……………」

スライムに しょうりした

「な なあ ばけものスライムのとうばつなんて ボクらには
にがおもくない？」

「だいじょうぶさ！ さっきあやしげなみせで でんせつのせい
けん エクスカリバーを ぜんざいさんはたいて かつたじゃない
か」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「きたな くらえっ！」

ブンツ ボキツ！

「えっ お、おれた……？」

「まさか これは……」

ビシツ バシ！

「にせものだあああああああああああああああ！」

パーティー パンジーにしょうりした

第三十四ゲル 無敵S VS 扱き使われている村人達 (一般人)

「おお スライムがおったぞ みんなのしゅう つかまえるんじやあ！」

ボタン カチャ

スライムを おりにとらえた

「しかしなんだ スライムなぞつかまえて どうするっつうんじやろ」

「さてなあ おやくにんの かんがえることはわからんわい」

「はたけもたがやさなならねつてのに めいわくなもんだ」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「おい あすこにも スライムがおるで！」

「ああ ええわい もうおりもいっばいだあ」

むらびとらは ひきあげていった

第三十五ゲル 無敵S VS パーティー デコチビ (ハンターLv・45)

「そっちいったぞ デコ!」

「デコいうな チビ!」

デッコーは アイアンネットを しようした

バサッ

スライムのほかくに せいこうした

「よくやったぞデコ! スライムつかまえてつれてくだけで 五
千万 かるいもんだ」

「しかしへんいしゅだとか ……こいつは ただのスライムだろ」

ガサッ……

モンスター スライムがあらわれた

「おっ またでたぞデコ!」

「いいかげんにしろ! おれはデッコーだチビ!」

バサッ

ブチッ!

「「えっ……!?」」

ベシッ バシィ

「「ぎゃあああああああああああこいつだあああああああ
あああ！」」

パーティーー デコチビにしようりした

第三十六ゲル 無敵S VS ベテランパーティー昇龍 リーダー ブレッド

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「くつくつく……さがしもとめていたよ あれから くんれん
をくりかえし かんせいしたわざ とくとみよ！」

ブレッドは スライムキラーを しようした

ストン！

スライムは こっぱみじんになった

「やった ……やった ついにかつたぞオオオ！」

「うーん むにゃ……かつたぞー……」

ブレッドは ゆめをみている

「む？ ぎゃ ああああああああああああああああああ！？」

ゆめのなかで スライムにはいぼくした

第三十八ゲル 無敵S VS 秀才パーティー マナバヤアタケラア・ヌヴェン

「スライムかー スライムといえば せいそくちはどこになる？」

「だいたいせかいじゅう どこにでもいる それよりもこのばあい スライムのとくせいをしらべる べきだ」

「それこそむいみ へんいしゅと ふつうのこたいの ちがいをしらべるべき」

「まずは あるくべきでは？ ミーティングもいいが それだけで むいみだ」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「だからだな……」

「ちがうー！」

「むいみー！」

「りかいふのうー！」

バシバシバシバシ！

「『『『ばかなあああずのうがまけたあああああああ
!?!?!?!」

秀才パーティー マナバヤアタケラア・ヌヴェント・ケルミーニ
スに しょうりした

第三十八ゲル 無敵S VS 秀才パーティー マナバヤアタケラア・ヌヴェン

豆知識

マナバヤアタケラア・ヌヴェント・ケルミーニス

訳……偉大なる高みへと到達せんため常日頃より神の知識に触れ
続ける賢い四人組

因みに略して、マヌケ

第三十九ゲル 無敵S VS 矛盾商人チャック (商人Lv・37)

「このたては すべてのごうげきをふせぎ このほこは あらゆるものをつらぬくよ！」

「なら そのほこで たてをついたら どうなるの？」

「えっ あ あー……」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「どうなるの？ ねえ」

「そ、それは……」

スライムの ごうげき

バガン！ ベキィッ！

「ああっ さいきょうのたてとほこがこなごなにいいいー！？」

ベシッ！

「「うわあああああああああああああああ！？」」「

矛盾商人チャックに しょうりした

第四十ゲル 無敵S VS スライム保護団体 (会員 × 3)

「はんたいい はんたいい スライムのらんかくを ゆるすなー！」

「スライムをほごしろー やばんなぼうけんしゃらに てっついをー！」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「おおっスライムだ こわがらなくていい われわれは きみたちを ほごしに……」

バシイ！

「ぎゃああああああああああああああー!?!」

「「かいちよう!?!」

ベシヤ ビタン！

「「うわあああああああああああああ!?!」

スライム保護団体に しょうりした

「おねがい わたしもたたかうわ かたきをうたせて!」

「ダメだ きみはてを よごしちゃいけない!」

「どうして!? かたきをうつまで いきろっていつてくれたじやない!」

「あれは……」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「うそつき! わたしは、わたしはっ!」

「ちがう! おれは……」

ビシッ バシィ!

「きゃあああああああああああ!?!」

「ぐわあああああああああああ!?!」

パーティー ラブアンドピースにしょうりした

第四十三ゲル 無敵S VS パーティー ローンウルフズ (ロック吟遊詩)

「は？ スライムう？ んなもんに きょーみねえし」

「おれたちや やりたいことやるだけなんだよ」

「いやでも ほうしゅう五千万だって……」

「「ご、五千万！？ ……なんつーか スライムていま どスト
ライクだし！」」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「「よっしゃ いっちょはでに……」」

ビシッ ガスッ

「「マジでかあああああああああああああああああ！」「」

「ひっ お、おれはなんのかんけいもな……」

ドグッ！

「ひゃあああああああああああああ！？」

パーティー ローンウルフズに しょうりした

「なんなのよアンタ！ スカイからはなれなさいよ！」

「えー！なんですかあー？ もしかしてえー、スカイさんとア
リイさんはあ そーいうかんけいなんですかあ？」

「！？ そ、そんなわけないでしょバカあ！」

「ま、まあまあふたりとも なかよくなかよく……」

「そーですよお あたしとスカイさんみたいに なかよくしない
とぉー」

「ッ！！ もうしらないっ！ おふたりとも おしあわせに！」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

(スカイのバカバカ！ だいつきらい！)

ビシッ！

「きゃあああああああああああああああああああ！？」

「アライ！？ うおおおおおおお！」

「あつ スカイさん!？」

「アリイは ぼくがまもるんだああ！」

バシン

「うわああああああああああああああああああ!？」

(そうなんだ これがふたりのつよいきずな …… かなわないな
あ ホント)

パシィッ!

「きゃああああああああああああああああああ!？」

パーティーー アーリースカイにしょうりした

「そつちだあー！ そつちにおいこんだぞ！」

“ つうしんじょうきょうよし りょうかい！ これより ……う
っ、うわあああああああああああああああ！？”

「なっ！？ どうしたクッキー！ ちっ、レンガよ クッキーが
やられたらしい！」

“ こちらレンガ しゅういにけいかいし ……ぐああああああ
あああああああああ！？”

「なっ ……もう やられたというのか？ そんなバカな……」

ガサツ ……

「！？」

モンスター スライムが ……

う うわあああああああああああああああああああああ

第四十六ゲル 無敵S VS 復活の神殿の人々

「さいきは ふつかついのりを うけるものが ふえています
ね」

「そうですね」

ガサツ……

「むっ!? だれですか!」

モンスター スライムがあらわれた

「なぜモンスターが!? おいだしてしまえ!」

「まちなさい …… かれはきずついています かいふくのじゅつ
を」

「しっ しかし モンスターですよ?」

「かけておやりなさい!」

「はい……」

エールは かいふくのじゅつをとええた

スライムは かいふくした

ズルズル……

スライムは できちへと すすんでいった

「な なぜ……?」

「モンスターにも ところがあります それをわすれてはいけません」

第四十七ゲル 無敵S VS 盲目の美女シーラ (救済者Lv.?)

「アナタは なんなのですか？」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「なんだか すごく かなしそうです」

“……………”

「きかせて あなたのオモイを……」

シーラは ダイブインマインド をしようした

“……………る……………こん……………く……………あい……………ド……………む……………ない……………”

「えっ？ よくきこえない……………?」

バシィ!

スライムの 一っげき

「わっっ……………」

スライムは にげだした

「あっ、まってー！ ……どうして どうしてなの？ きこえなか
ったの はじめて……」

第四十八ゲル 無敵S VS 体調の悪い男ベイン (破壊戦士Lv・88)

「うづつ くそつ なんだかふらふらするし さむけがするぞ…
…?」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「ちくしょう スライムかよ ……きょうはみのがしてやる な
んだか はなもむずむずしてきやがったしな!」

べちやつ!

「ぎゃ あああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああ!」

ベインに しょうりした

「ちく、しょう ……たいちようさえ、よければ……」

バタ……

スライムは たちさった

「ふううん！ はあああつ！」

月光照らす野原の上で、一人の男がひたすらに剣を振るう。少しでも腕に覚えの有る者ならば分かるだろう、荒れ狂う波にも明確な法則があるのだと。

男の名はブレッド。かつてのパーティー昇龍のリーダーであり、かつて魔王打倒でさえを目標にした男。

だが……そんなものは無価値だったと、彼は言った。

「俺様は……いや俺は、勝ちたい……」

頭を丸坊主にし、何故か片眉を剃り落とし、どうしてか上半身裸で素振り続ける彼。その鬼気迫る様子は東洋で言うところの赤鬼か閻魔大王か、である。

「ざああ！ だりやああああ！ ……何か用か」

ピタリ、と素振りを突如止めた鬼は言う。

「さつきからずっと、こちらを伺ってるよなあ？ 誰だか知らんが出てこい、相手になるぞ」

ブレッドの指摘した木陰から、それは素直に月の下へと現れた。

「さすがです……パーティー昇龍……リーダー……ブレット殿」

「女、か。残念だったな、俺はもうリーダーではない。ただの冒険者だ」

「そうでしたか……しかし……パーティーの方は……あなたの帰り……待ってましたが」

ハエがブンブンと頭の周りを回ってるみたいな調子で、女は語る。だがブレットには、不思議と一言一句がはつきりと響いた。

「では……一つだけ、お聞きしても？」

「内容次第だが」

「……申し遅れましたが、私はアサシンアサルトというパーティーのリーダー、クリスといいます。名前位は知っているでしょう？」

女は顔を覆う覆面を外し、言った。月光があるとはいえ、微かに口元と目元が見えた程度だ。

が、ぶつちやけて言うならば期待通りの美女であった。ブレットが以前公言していた好みのタイプ、それともピタリ合致する。

「スライムに関する依頼……あれを出したのはあなた？」

クリスは問う。依頼とは、無論アレの事だ。今世間で話題騒然の

ヤツなのだ。しかしブレットは知らん！ と一喝。更には詳しく教えると言え言つて来たのである。

「えつと……だから……突然変異スライム討伐で五千万エン、とあなたがリーダーだったパーティーから……依頼が出てるの」

「なんだとおお！？ 馬鹿かあいつらめ…… “パーティー昇龍は無様にもスライム如きにやられてしまいました” と言ひ触らしてゐる様なものではないか！」

「まあ、そんな些細なゴタゴタは放置して……」

「些細だと！？ 放置だと！？」

「つまりアナタは、とてつもない素早さと攻撃力、知性までも兼ね備えた化け物スライムに負けたという事だろう？」

「ち、知性があるのかは知らんがそうだ！ 信じられるのか、この惨めで無惨な俺様を！」

「ええ」

「……え？」

「ええ」

「え、ええええ？」

一言どころか一文字。

「私も、そいつにやられたからだ。ただのスライムと変わらない外見だった……」

ガサツ……

「「!?!」」

モンスター　スライムがあらわれた

「ほう、噂をすればなんとらや、か。丁度いい……」

ブレッドは戦闘態勢に入る。

「……私もだ、私にも戦わせて貰う」

クリスもまた、戦闘態勢を取る。

「引っ込んでろ、アレは俺の怨敵よ」

「なんとやらを、なんとらや、とか言う男は危ない。お前こそ引っ込むがいい」

「……好きにしろ。ただし邪魔はするな」

「お前こそ」 二人は同時に駆け出した。

つづく

この世界において“最強のモンスター”との烙印を押されているのは如何な存在か？

意見様々、異種異論はあろうが大概の人々はこう答えるであろう。

“魔王”と。

「ふふっ、もうちょっと」

天高くそびえ立つ魔王城、その最奥の一室にて魔王と呼ばれる者は密かにほくそ笑んでいた。

魔王“カルミンツアー”である。漆黒の鎧を身に纏い、二本の角は雲を向く。それは代々続く由緒正しき魔王の血統の証だ。

だが魔王とはいえ、れっきとした女でもある。初め女性であるからという理由で魔王候補が乱立しかかった事もあったが、最近はその実力を思い知ったのか異論を唱える者もいない。

「……何をなさっておいでです、カルミンツアー様」

「ああ、ドクトル。見て分からない？ 部屋を薔薇の花で埋め尽くそうかと思つて、一本一本植えてるのよ」

ドクトル、と呼ばれた白衣の男は、シルエットの約半分を占める程の巨大な頭を揺らし、言う。

「見れば分かります。その様な行為をなさる意味を訪ねていますが」

「それはね、勇者セインの為よ。彼がここへと辿り着いた時こそ最後の戦い……それをより派手に演出するの。攻撃の度に花びらが散るなんて絵になると思わない？」

「勇者セインですか。貴女は口を開けばそればかりだ。既に悪魔四天王も敗北しました、暗殺でも闇討ちでも行えばいいと考えますが」

「ふうん、ねえドクトル……あなたももつと感情的になりなさいよ。人間でも唯一私の目になつた者、そう、セイン。でも私は魔王だった、許されざる関係、覗く悲劇。それを精一杯飾るのに意味は無いかもしれないけれど、気分は凄く高ぶるの。どちらかが歴史のページになるのは必死、だけどそれが私であれ彼であれ、ただの一枚じゃツマラナイ……アナタに分かつて？」

「理解に苦しみますな」

「ま、いいわ。ちょっと出掛けて来るから」

「また……奴の所ですか」

「野暮はなしにして頂戴。じゃ、留守は任せたわ」

魔王は窓を開け放つ。雷と暗雲と時々強風……背中のコウモリ状な翼を広げ、飛び立った。向かい風を切り裂き推力に変えて。

「……ふん、ヒロイン気取りの小娘が……。私の様な知識を持つ者こそが、王に相応しいのだ……。なあ、わたしの可愛い可愛い……」

ガサツ……

勇者セインは、道に迷っていた。なんとか山を二つ越えた、が、仲間とは依然はぐれたままだし、そもそもここがどこか分からない。

「うう……は、腹が、減って……目眩が……」

山を下り始めた頃合いからか、モンスターが一匹たりとも現れなくなつた。現状、モンスターを求めるセイン、理由は人間三大欲求の一つ、食欲。

「く、そ……なんで……モンスターがないんだろう……め、メシ……」

遂に膝が地に付く。景色が暗転しぐにやぐにやにねじれて来た。最早限界か、という時に彼を救つたのは一陣の風だった。

本当は誰かが居ると分かってる。嗅覚刺激がなによりの証拠だ。

「はぁーい……あら、勇者セイン様」

「え？ ……ええええ！？ カルミーさん！？」

そう、勇者と魔王は顔見知りだったのです。

「いただきまーす！」

セインは りょうりにとびついた

「ふふふっ セインさまたら よほどおなかを すかせていたの
ですね」

「あっ っ、これはしつれい おみぐるしいところを……」

「いいえ おいしそうにたべられるのは なんだかうれしいです
さ、どんどんたべてください」

「あ、ありがとっございます ほんとうにカルミーさんの りょ
うりはおいしいです！」

たべるセイン ながめるカルミンツアー

「ん！？ カルミーさんがって なにかいるー！」

「えっ？ ええ……」

(たしかに ……なにかしら このまがまがしい けはいは)

ガタッ……

モンスター スライムがあらわれた

「スライム？ ……いや ちがう もっともっとじゃあくな
にかだ」

スライムは メタモルフォーゼを しようした

スライムは ゆうしゃセインの すがたをコピーした

「「なんだと!?!」」

キーン！ カーン！

「くっ こいつ のすりよくまでいつしょなのか!？」

(たしかに ……あのうつき セインにまるともおとらない)

「!?!?!?!」

ばしっ！

セインのつるぎは くれた

「しまった!?!」

スライムの ついげき

「セインは ……やらせない!?!」

カルミンツァーは アブソリュートゼロを しようした

「!?!?!?!?!?!?!?!」

スライムはこおりつき こなごなにくれた

スライムに しようした

「な、なあ おれたち だいじょうぶだよな？」

「だいじょうぶさ しつかりと たんれんをつんできたじゃないか！」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「へっ スライムなんぞ ひとひねりだ！ いくぞ てんちのかまえ！」

「おおっ はじやのかまえ！」

スライムは ようすをみている

「くらはひっさつ てんちいんようあつきめっさつはじやたいせいおおばんちかいなんかせいじよ、ガリッ……」

ふたりは したをかんた

ビシ バシィ！

「うわああああああああああああああああああああああああああああああああん！」

パーティー
タンポポにしようとした

第五十五ゲル 無敵S VS パーティー味噌醤油風味

「ぎゃ ああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ!？」

ビシッ!

「ぐはあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ!？」

ドスッ!

「なんとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお!？」

スライムは しょურიした

「……………くそう ……おれたち なまえすら……………」

べちやつ!

「ぐはあああああああああああああああああああああああ!？」

パーティー味噌醤油風味に しょურიした

第五十六ゲル 無敵S VS 宿屋の受付嬢 (一般人)

「いらっしやいませー！」

ガサツ……

モンスター セインスライムがあらわれた

「おとまりですか？」

セインスライムは うなずいた

「えっと おへやはどちらに……」

チャリチャリン……

セインスライムは 3000エンを しはらった

「あ、ありがとうございます 3000エンと……は いうばんですねー」

セインスライムは うなずいた

「では 303号室です べつじぞ」

セインスライムは へやへと いそいだ

(みつけたぞ ゆうしゃセイン……)

くくいのおとこは セインスライムの あとをつけていった

第五十七ゲル 無敵S VS 黒衣の復讐者 (デモンLv・88)

「ゆうじゃ セインのへやは どこか……」

303号室まえ

「きさまにうけた くつじょく いまこそはらすときー」

バァン！

「ゆうじゃセイン かぐー！ー」

モン……

へやのなかには スライムがいた

「なにっ！？ セインはどこだー！」

バシン！

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおー！？」

あくましてんのう デモンカイザーに しょうりした

第五十八ゲル 無数S VS 宿屋の窓ガラス (1250エン)

「なにごとですか いまのひめいはー!?」

303号室に ひとがあつまってきた

「なんだあれ!? モンスターがたおれているぞ あくまだ!」

ガサツ……

「おい あそこにもなにかいる!」

モンスター スライムがあらわれた

「なんでスライムやら あくまが こんなところに……?」

パライイイイン!

スライムは まどガラスを ふんさいした

シュバツ!

スライムは にげだした

「ああつ にげた!」

「まってー せめて ガラスのしゅうりだいをー!」

チャリン

しゅうりだいが
なげこまれた

第五十九ゲル 無敵S VS 隙を伺っていた男マーフィ

(ギャンブラーレ)

「よし いまだ!」

マーフィは スライムをほかくした

「よっしゃ こんどこそ あたりだろ! ぼうけんしゃを けち
らしていたの みてたんだぜ!」

スライムは ていこうしている

「むだだむだだ このかごは キルフハツシャのかごだ おまえ
にはもつたいないレアアイテムさ!」

ガンッ ガンッ!

「さーて いらいぬしのところへ もっていくか!」

ガンッ ガンッ ガンガンガン ガガガガガガガ

「うわっ!? いてて おとなしくしてる!」

スライムは つれていかれた

第六十ゲル 無敵S VS スライムを捕獲した男マーフィ (ギャンブラー)

「よし ここか」

マーフィは パーティー昇龍の ほんきよちにたどりついた

スライムの ていこうはやんでいた

「おい スライムをもってきたぜ こいつこそ まちがいなくほんものだ」

「かくにんさせていただきました ……しんでませんか？」

「なんだと!？」

スライムは ほづかいしている

「ばかな さっきまでは ぴんぴんして……」

マーフィは かごをあけてしまった

ヒュッ バキィッ!

「ぐあああああああああああああああああああああああああああああー?」

マーフィに しょうりした

「まちがない こいつだ このスライムがやつだ！」

パーティー昇龍は さっきだった

「いまはなき おじちゃんのかたき とらせてもらっつからね！」

「いや ぶつづに ピンピンしてますが？」

「ま、まあともかく かくごしろスライムめ！」

“……………”

スライムは メタモルフォーゼをしようした

パーティー昇龍リーダー ブレッドスライム があらわれた

「「「なにいい!?!」」」

ブレッドスライムは ひっさつのかまえを とった

「ちょっと あれってまんま おっちゃんじゃん わたしむりー」

「いくらにせものかわかっていても……やりにくいですね」

「くそオオオオ なんだつてこんなことー！」

スライムは おつぎを はなっ……

「なにしているきさまらー！ パーティー昇龍のながなくぞ！」

“！？”

「このこえは……」

「もしかして……」

「いや もしかしなくても……」

「てきをまえに すきをみせるなど おしえたはずだー！」

リーダー ブレッドがあらわれた

「「「リーダーー！」「」」

「スライムやろう おれがきたからには もつすきにさせんー！」

“……………”

ブレットは ひっさつのかまえをとった

くじく

第六十二ゲル 無敵S VS 被害者代表リターンズ 1

「喰らええ、ソードバンカアアアアー！」

地を捲り上げ奔る衝撃波。ブレッドの放った一撃により戦いの火蓋は切って落とされた。

ブレッドスライム、略してスラブレはひよいと身を躲すと、本物と同等の大剣、を片手で操った。負けじと剣を正面からぶつけるブレッド。

「ぐぐっ……力比べは不利か、だがな……」

「リーダー、任せろ！」

「応！」

ブレッドは更に力を込め、スライムの両手を、剣を封じる。その隙に背後より戦士ノールの剣撃が強襲。

キーン！

と、金属音。背中目がけ振るった剣は第二の剣、それを持つ第三第四の腕により阻止されていた。背中、肩甲骨下より生えた腕が二本。

「うおっ、なんじゃこりゃあ!？」

「ビビってんじゃねえノール、何でも有りな相手なんざ今更だろ！」

二人の力にびくともしないスラブレ。そこに魔法使いが言う。

「二人とも間に合ったら下がってねー！ ひっさあーっファイヤレイン！」

上空に描かれた巨大な魔方陣。炎魔法使いフェイによる広域殲滅魔法が発動したのだ。一定範囲内へと隕石群が如く火球が降り注ぐ。

「「ちよ、フェイイイイイー！」」

どうにか効果範囲から滑り込みで脱出した二人。一方スライムは爆心地に居た。荒れ狂い燃え盛る炎の雨が偽物にヒットする度、姿をグニヤリと溶かし変形させてゆく。

そこに賢者クロルが、術式を完成させた。光が突き出された両手の平に収束してゆく。

「聖なる光よ邪を貫けディバインレイザー！」

焦土と化したその場所へ、三本の光の矢が飛来。人間の型を崩しつつあったスライム本体を確実に穿つ。未だ、ピクピクと敵は動いていた。

「リーダー！」

「いつけえおっちゃん！」

「今です早く！」

メンバーの声が重なった。ブレッドは熱くなりつつある目頭を押さえつつ、四肢に力を込める。

「お前ら……ようし、任せろ！」

地を蹴り上げ、ブレッドは再度……いや、今度こそスライムへと突撃を敢行する。本人の強い感情か、はたまた技か剣がより鈍く光っていた。

と、そこへ彼と足並み揃える者が一人、どこからともなく現れた。直前まで、存在を気付かせないとは流石である。

「私も行かせて貰うぞ、ブレッド」

「クリスか！？ 無事だったようだな」

「当然だ、奴を倒すまで休む訳にはいかない」

短刀握りしめ走るのは、パーティーアサシンアサルトの元リーダー、クリス。目的は彼女も一緒、スライムの打倒である。

「それはダメだ、トドメは俺がさす！」

「なら競争だ、早い者勝ち」

「それでいい！」

「おまえたち クリスをつれてたいひだ おれがじかんを かせ
ぐ！」

ブレットはいった

「いいリーダー おれものこるぜ ちゅじゅつつかいのクロル
と フェイはさっさとにげる！」

「どつやら ぜんめつをさけるためにも そのほづがよいでしょ
う どつかがごぶしで」

クロルは てったいした

「わたしはのこるよ！ なぐるけるばっかじゃ バランスわるい
でしょ」

「すまんフェイ では いくぞ！」

「おつー！」

スライムらは いっせいにうごいた

「おれたちの（わたしたちの）たたかいは これからだ！！
！！！！」

むてきスライムは こんかいをもって しゅつりょつです

いままでの しゅめいどく ありがとうございました

第六十三ゲル 無敵S VS 被害者代表最終回(後書き)

ウンですよー。

“ぼくは ほんとうは じんなじとしたくないよ のんびり
してたいんだ!”

そのままな かんがえが じじやくする

「な、なあ ボクたち だいじょうぶだよな？」

「しんぱいするな ボクたちには “けものよけのおこつ” があるじゃないか モンスターとはそうぐうしないよ」

ガサツ……

「ひつ なんだよ おこつきかないじゃないか……」

「じょうきゆうモンスターか!？」

モンスター スライムがあらわれた

「なんだ スライムじゃ……」

「まつんだ ステータスのかくにんをしよう」

アイテム チェックキーをしようした

【スライム】

じつげきりよく??

ほつぎよりよく??

第六十六ゲル 無敵S VS 本気の賞金稼ぎライル (ソードマスターLv

「もはや しょうきんなど かんけいない!」

スバツ!

スライムを げきはした

ガサツガサツガサツガサツガサツガサツガサツガサツガサツ……

スライムの たいぐんが あらわれた

「いくらいようが わたしはとまらぬ!」

ライルは サウザンドカッターを しようした

スライムの たいぐんをげきはした

ガサツ……

「まだいたか……」

スライムは メタモルフォーゼを しようした

モンスター ライルスライムが あらわれた

「っツ! こんどはさるまねか くだらん!」

ライルは メガスライスをくりだした

ライルスライムは メガスライス をくりだした

ガシャア！

「……………ぐあああああああああああああああああばか
なっ！？」

ライルに しょうりした

“ おまえは ぼくのなかまを きずつけた けしてゆるさない…
…”

第六十八ゲル 無敵S VS 一般的スライムA (スライムLv:8)

“!!!?!?”

スライムAは かけからおちそうになっている

ガサツ……

モンスターー スライムがあらわれた

“!!!”

スライムは て(?)をさしだした

“!!!?”

スライムAは て(?)につかまった

スライムは ひきあげた

“……………!”

スライムAは れいをいっている

“……………”

スライムは せなか(?)をむけると クールにたちさった

“！！”

スライムAは おいかげようとしたが とちゅうでやめ ーこころ
のなかでしずかに かれのぶじをいのった

第六十八ゲル 無敵S VS 一般的スライムA (スライムLv:8) (後書)

むによむによした関係

スライムに しょうりした

第七十一ゲル 無敵S VS 魔王カルミンツァー (魔王Lv.?)

ぞっぞっ

まおうカルミンツァーは まおうじょうへと むかっている

「……ゆうしゃセイン やはりこんわくしていたな……」

ガサツ……

モンスター スライムが あらわれた

「ふふ とうぜんか…… ほれたおんなが まおうだものな」

じり……

「だけどな わたしも……」

スライムの こうげ……

「あまいわ……」

カルミンツァーは セパレートスレイブを しょうした

“……!?!?”

スライムに しょうりした

「だがそれはいい ゆづしやは まおつとたたかづのだから」

「ぐわあああああああああああああ!?!?」

おやこづねに しょうりした

「うーん やっぱりセインは こっちにはいなかったよー」

ファルは ほづこくした

「わたくしも セインさまをかんじることは できませんでした」

シーラは ほづこくした

「こっちもだ あいつはバカだから めんどうだな……」

ドライブは ほづこくした

ガサツ……

「む!?!」

「これはっ!」

「ほえ?」

ドライブはとっさに ソウルパンチをしようした

シーラはとっさに きゅうさいのひかりを しようした

ファルはとっさに ひのたまバスターを しようした

“……………!!!!?”

スライムは あらわれたしゅんかん けしとんだ

スライムに しょうりした

「む……またしてもあのさつき やはりただのスライムではない」

「うんうんそだねー からだがとっさに はんのうしちゃった」

「おふたりとも ひどいです！ まずはあのおかたと おはなしを……」

「あのかたもなにも スライムだったよー？ シーラちゃんはめがみえないから しかたないけど」

「モンスターにも こころがあるのです きちんとむきあえば はなしあえるはずですよー！」

「まあまあシーラ あいつはマジであぶないって はなしあいなんか できるふんいきじゃ なかったぜ」

いいあいは しばらくつづいた

第七十四ゲル 無敵S VS 魔王側近ドクトル (悪魔学者LV・125)

「おかえりなさい カルミンツァーさま」

ドクトルは あたまをさげた

「ただいま ……ゆうしやに せんせんふこくは すませた あとは じゅんびがあるから わたしとわたしのうえのへやには いらぬでね」

「……しろうちいたしました」

カルミンツァーは へやのほうへと はしりさった

「……ふん そうしてそこに こもっているがいい わたしが おうのちからをてにいれる そのときまで」

ガサツ……

「さあ もっとデータを あつめるのだ ゆけい！」

ズルズル……

「うっ うわあああああああああああああああああああ!?!」

ガサッ……

「ひっ、っっ、っっちにも!」

ベシッ!

「ぎゃ ああああああああ!」

ガサッガサッ……

「………なんと!」とじゃ このむらもついに おわるときが
きたのか!」

ガサッ……

モンスター スライムがあらわれた

「………かみよっ!」

ドカッ!

「……?」

「あきらめんのは はやいぜ ジーさんよ!」

「あ、あんたは……?」

「なのるほどのものじゃねえ だが そうだなコイツらを たお
したいだけのおとこさ!」

ズバツ!

“……!!……!!?”

スライムを げきはした

「あ ありがとうございませすじゃ ……しかし もつむらは……」

「いいや まだだ ぜつぼうをしまったにんげんなら なににもま
けん!」

ブレットは いった

「ハーツハツハツハツ せけんのれんちゅうは なさけない た
かだかスライムを おいかけまわしていたのだからな」

「まったくおれたちが きけんちたいでがんばってたつて
のに くだらねーよのなかに なったよなあ！」

「スライムごとき ゆびいっぽんで しゅんさつだな」

ガサツ……

モンスター スライムがあらわれた

「おっ？ うわさをすれば、ってやつだな どれ ホントにゆび
いっぽんで たおせるかためしてみるか……」

ヒュッ！

「なんだ？ いまの……」

ボコッ！

「ぎゃあああああああああああああああああ！？」

「ピーク！？ なにがあったん……」

ヒュッ ヒュッ！

「「えっ……？」「

ガッ！ズドッ！

「「うわあああああああああああああああああああ！？」

」

上級者パーティー 狼牙にしようりした

「おおっ なんとおそろしい！ あしきものが せかいをおおい
つくす それも いっしゅうかんのあいだに……」

うらないしグランドマザーはいった

「なんと ……それで あしきものとは いったい？」

「まるい ……そして かたちを もたぬもの」

「まるいが かたちをもたぬだと？ いみがわからぬ もっとわ
かりやすい たとえはないのか？」

「わからぬ ……だが つなみのように おうとへと おしよせ
る いまのうちに にげるがよかるう」

「ふん おうが くにをみすててにげるものか われらがへいり
よくをもって けちらしてくれる」

ベグランシュ王は うらないやかたを あとにした

「だめじゃ ひとのちからではどうにもならんよ ひとりのおと
こと ひとりのまぞくを のぞいてはねえ……」

第八十ゲル 「お前らが居たからああああ！」

「……なんだ、これは」

勇者セインが見たのは、変わり果てた故郷の有様だった。建物という建物は形を崩し、あるいは紅蓮の炎にのまれつつある。

人々はまるで物の様にそこらへと転がっている。いらぬ人形の様は無造作にだ。

「なんなんだよ……これはあああああ！」

「その声、セインかい？」

「!？」

今、確かに半壊の建物の下から声がした。そうだ、ここは村一番の世話焼きおばさんの家である。慌てセインは残骸をどけてみれば、下敷となったおばさんの姿。が、幸いにも僅かなスペースによって重量がモロには掛かっていないらしい。

「待つてておばさん！ いま助けるから！」

するとおばさんは首を振る。

「あたしは大丈夫だよ。それよりもあなたのご両親や村の子供達は無事かい？ あたしはそちらの方が余程心配さ」

「それは……」

子供達も何人か倒れていた。ピクリとも動いてはくれず、生死さえ定かでなかった。

「あたしゃ大丈夫さ。見ての通りぴんぴんだ、いつまでも元気な婆に構ってないで、もっと危ない目にあってる人達を助けておやりなさい！」

「おばさん……わかった。だけど危ないから動いちゃダメだよ！」

本音を言えば、家族が一番心配であった。脇目も振らず自宅に走る、走る。

そうしてたどり着いた自宅は例外なく見るも無残な格好になっていた。父と母を、懸命に呼んだと思う。そうして何度目だろうか、裏庭にて二人の姿を確認した。しかし……

父は、母に覆いかぶさる様にして、時を止めていた。

父さん、母さん、と駆け寄るセイン。反応はない。父の背には無数の傷痕。まるで母を何かから守り続けていたみたいだった。

「父さん、母さん!？」

しかしセインの接近を阻むものがあつた。どこに潜んでいたのやら、無数の球体……スライムが姿を現したのである。

「スライムだと……まさか？」

あの時の記憶が脳を駆けた。あれは、スライムが自分の姿をコピーし追い詰めた時の事である。この戦いで自分はカルミーに救われて、カルミンツァ - という彼女本来の姿を知ったのだ。

「また……お前達か」

スライム達はメタモルフォーゼを使用した。

「お前らが居たから、俺は失ったんだ……」

勇者セインスライム達が現れた。

「お前達が居たからあああああああああああああああああああ！」

第八十一ゲル 無敵S VS 勇者セイン 2

「おまえらがいるからああ！」

セインは つるぎをぬいた

セインスライムらは いっせいにうごいた

ヒュッ！ ブンッ！

セインは かわした

「うおおおおお！」

セインは ライジングブレイクを しようした

スライムをにたい げきはした

ズバッ！

「ぐわっ！？」

セインにダメージ

バキッ！

「がっ……」

セインにダメージ

ズル…ズル…

スライムらは たおれるセインに せまってゆく

「くそっ…くそっ！ まけられないのに からだよ うごいてく
れえええ！」

セインスライムたちは ダークソードを くりだし……

「ええーい ブリザードゲイル！」

「!?？」

スライムは こおりついた

「このまほつは まさか!？」

「みつけたよーセイン！」

ゆっしやパーティーー らがあらわれた

「セインー ようやくあえたねー さいかいのチューはー？」

「セインさま ぐぶじでなによりです」

「あとはおれたちに まかせておけ！」

ゆうしゃパーティーは せいぞろいした

「ファル…… シーラさん…… ドライウ！」

「」「」おっ！」「」

なかまたちは どうじにうごいた

「さーと ブリザードからの デストラクションハンマー」

バキン！

「セインさまに てだしはさせません ホーリーレイ！」

ビギュッ！

「バーニンナックルだああ！」

ズドン！

「うおおおおおオオオオ！」 セインの こっげき

スライムのむれを げきはした

「みんな……」

ゆうしゃパーティーは ぜんいんしゅうこうした

「だいじょうぶですか？　すぐに　わたしのちゅじゅつで　なお
します」

「じいさん　あるけるかい？　むちゃはするなよ」

シーラとドライウは　きゅつじょかつどうを　している

「……」

セインは　りょうしんのはこびこまれた　たてもののなかにいる

「だいじょうぶだよーセイン　シーラのちりょうは　たいりくい
ちだもん」

「ああ　……そつだな　ファル」

ははおやはきぜつしているだけだったが　ちちおやは　じゅつし
ようだった

「なさけないな　ぼくがもうすこし　はやくかえっていれば……」

「それはちがう　セインはむちゃばかりいうね　はやくついでた

ら あいつらにやられてたかもー」

ファルは いった

第八十五ゲル 無敵S VS 勇者パーティー 2

「なんだ さっきのひめいは!?!」

ゆうしやセインとファルが あらわれた

“……”

モンスター オーバータイムの こうげき

「ぐっ!?!」

セインに ダメージ

「セイン!?!」

バキイ!

「わあああああああああああああー!?!」

ファルに ダメージ

「ぐっ ……なんて パワーなんだ……」

“ ”

スライムは こうげきをつづけている

「がああああああ!」

セインに ダメージ

「やめ ろお」

スライムは ターゲットをへんこうした

「!? まで ファルにてをだすなあ!」

スライムのこうげき

バキィ!

ファルに しょうりした

「う うあああああああ!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

バキィ！　ズドン！

ちようゆうしやセインは　あばれている

「セイン　ダメ　わたしは　ダイジョブ　だから」

「ウオオオオオオオオオオアアアアアアアア！」

「セイン　やめて！！！」

「う　フ、アル？」

「うん　ダイジョウブ、だから」

セインは　もともどった

第八十七ゲル 無敵S VS ベグランシュ王国軍

「ぎゃああああああああああああああああ！？」

スライムらは しろをめざししんこうしている

「ええい どうにかくいとめられんのか？」

「ダメです くいとめられません！」

「くっ グランドマザーの よげんはただしかったらしい
やむをえんか」

こくおうは てったいめいれいを くださった

「バカな！ くにをおわらせるおつもりか！？」

「そうではない スライムどもに もくてきなどまるで
なかるう このままでははなしあいのよちなく ぜんめつだ
だからいまはにげるのだ」

「 やむをえない、か スライムども いまはひく
だがおぼえている かならずくにはとりもどす」

おうこくぐんは てったいした

よげんどおり くにほろびた

第八十八ゲル 無敵S VS 孤独のセイン (勇者Lv・5000)

よくあさゆうしゃセインはすがたをけした

”みんなごめん おれはいますぐ あるばしょへとむかう
みんなはけがを しっかりなおしてください”

とのかきおきが のこされていた

「あのやろう またひとりで……」

「せめて そうだんはしてほしかったです」

「わたしのせいだ わたしがけがさえ しなければ……」

(ごめんみんな これいじょうはやらせないから あれほ
どのスライムをあやつれるのは たぶんかのじょだけだ……)

ガサッ……

モンスター スライムがあらわれ……

ズバッ!

”!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!?”

モンスター スライムにしょうりした

(だから おれはかのじょと まおうとたたかう！ それ
でこんなばかげたたたかいを やめさせてやる)

セインは まおうじょうをめざした

第九十ゲル

無敵S VS

伝説の英雄(笑) シューン

(ダークネスウォール

「うう

おれの“邪眼オニキス”

がうずきやがる

…

…これはまおうがちかいあかしか まっているまおう ”海皇
剣リヴァイアサン”と”星煌剣フェンリル“ のさびにしてやる「

ガサツ……

モンスター

スライムがあらわれた

「おっとお

おれはザコにもようしゃしない

はでにち

れ“暗黒の堕ちた天使”

ダークネスウォールエンジェル

バシィッ!

「ぐっあああああああ

みぎてのオーデインさえつかえれ

ばああああああ!?”

でんせつのえいゆう

シューンにしょうりした

第九十一ゲル 無敵S VS 包帯男ブレッド 1

「この道をずつと歩くんた。5日ほどで魔王城に辿り着けるだろう」

中年の男性はまるで見えない道の先を、枯木の枝のような指で指し示した。

「やれやれ、防衛ラインも随分とさがったものだ。以前はこの辺りも魔族領で訳のわからん建物が一杯あったつてのに」

全身に包帯を巻く男は、中年の視線も気にせず言った。

「それも全ては勇者のお陰だろうさ。この辺り支配してた、なんとか言う化物をものの2日で倒しちゃった。残ったのは不毛の土地と残骸だけだ。だあれも近寄らねえ」

魔族領の名残というヤツはいまも残っている。とはいえ殆どは魔族の異様な骸骨か、あとはなんらかのがらくた。建物を初めとしたものは領主の魔力で構成されている、というのは事実らしかつた。

「そうか。……ここまで案内ご苦労、約束の報酬だ」

「いいえ旦那、そいつは結構だ。おらはもうじきお迎えが来る、そんなもの貰っても使い道がねえや」

「そうか……では達者でな」

現われたのは先程の中年男、破滅と怠惰をたたえた瞳は消え、餌を狩る狩人の目となった。

「いや、なんとなくだ。胡散臭いとは思ってたが、方向は大体あったし疑う余地はなかった」

包帯男、ブレットは武器を構えた。

ゆうしゃセインは まおうじょうにちかづいている

「あとすこしで まおうじょうだ このままいければ
あといちにちほどか」

「セインは もうすぐここにくる わたしとけっちやくを
つけるためにだ」

まおうのまで カルミンツァーはまっていた

「ゆうしゃとまおう まじわらぬかんけい だれよりも、
どんなかんけいよりも ……だがヤツとわたしは ひかれあつ
た ひげきのヒロインでいたかったわけでない のぞんだわけ
でもない たまたま、そうなった」

ガサッ……

モンスター スライムがあらわれた

「たいせつにさせてもらうさ ひととあくまの ものがた
り」

カルミンツァーは センテンスジューンをしようした

“!!!!!!!!!!?”

スライムは けしとんだ

「わたしはまっているぞ

ひゃくねんも

せんねんもなあ

ズバアッ!

“!!!!!!!!!!!!!!!!!!?”

スライムをげきはした

「はあはあ どうやらついたようだ」

セインは まおうじょうにたどりついた

「しかし スライムしかいないというのは どういうことだ? ほかにせんりよくはないのか?」

”ようこそいらっしやいました まおうカルミンツアーさまは おくでおまちです どうぞおふたりきりの デイナーをおたのしみください”

おんせいのみが ひびきわたり じょうもんがゆっくりひらいた

ガサッ……

モンスター スライムがあらわれた

「ちっ なにがふたりきりだ!」

セインは まおうじょうをすすんでいった

ズバアッ！ ドスウ！

”……………!!?!”

スライムをげきはした

「くそっ つぎつぎと！ どこだカルミーさんは」

セインは どんどんすすんでいる

しばらくすすみ セインはとあるへやをみつけた

“魔王の間 カルミンツァー様のお部屋”

「……………わな じゃないよな うん」

セインは へやにふみいった

「あら ゆうしゃセイン ようやくついたのね きてく
ねるとしんじてた」

「カルミーさん……………」

「カルミンツァーよ ゆうしゃセイン」

ガサッ……………

モンスター

スライムもあらわれた

「セイン、ようこそ我が城に。歓迎は出来ないが、まあ私の意図を汲み取って頂きたいな」

「いいや不要でよかつたんだ、カルミーさん……」

“……！”

「おやおや私をまだその名で呼ぶか、案外未練がましいな勇者」

「あなたの本心が知りたいんだ、俺は！」

「本心？ 本心もなにも、私は魔王で貴様は勇者、ただそれだけの事だろう」

カルミンツァーが一步步み出す。

「スライムが群れを成し俺の故郷を襲ったのもあなたの仕業か！？」

セインが言う。

「ほう？ 覚えは無いのだがな」

「スライムは元来から群れ成すことない大人しい生き物だ。あれでは強力な兵器でしかない……悪魔四天王亡き今、そんな真似が出来るのはあなたをおいて他にないから」

「ふうん、興味無い事柄だ。私はハナっから貴様にしか興味は無い……人間も、魔族ですらもどうでもいいのだ。魔王として、女としてお前と戦いどちらかが失せる。私にして見ればこれこそが全てであり、理由である」

「……要は、関係無いってことか……」

「さあ、要らぬ討論はこれまで。剣を抜け勇者よ。存分に奪い陵辱し貫いて……堕ちよ！」

カルミンツァーが右手をかざす、と同時にセインの身体がはじかれた様にその場を跳んだ。ついさっきまでの足の位置が爆ぜ、消滅する。

” !!!!!!!? “

スライムはしようめつした

「やるな、ではこれは？」

続けざまに、右の手のひらからは火炎が、左の手のひらからは雷が顕現し襲い来る。

「未練がましいのはどっちだカルミーさん！」

セインの振るう剣は一本の銀線となり、魔術を払う。間合いは見る見る間に縮み、勇者の斬撃が魔王にはしる。が、切っ先は二本の細指に摘まれ、直後にはキインと音をたてて折れた。

「どうやらとんだ安物を掴まされた様だな」

「業物だ。一度も手入れた事が無いだけの」

ガサツ……

スライムがあらわれた

「せめて、伝説の武器だとかを持って来るべきだったな！」

カルミンツァーの拳に魔力が集う。虹色の輝きに暫し目を眩まされながらも、セインは次撃を振るう。感触はなし、代わりにどの魔物に喰らった一撃より、邪龍に受けた一撃より遥かに重い拳を正面から受ける。

「ぐあああああああああ！？」

遙か後方に飛ばされるセイン。途中、スライムを巻き込んだお陰で、叩き付けのダメージが軽減されたのがせめてもの救いだった。

“！！！！！！！！！”

スライムはほうかいした

「何故だ、この期に及んで何故迷う？ 私の知る貴様の剣撃はこんなものではない筈だ……まるで躊躇しているかのようだぞ」

セインは歯をギリリツ、と食い縛り立ち上がる。

「最初は、斬るのもやむ無しと思っていた……カルミーさんが、魔王カルミンツァーであったなら」

「何を言う。私は紛れもなく魔王カルミンツァーであるぞ」

「戦う理由が無くなった……その声も、その身体も、その顔も、その仕草も……全部、カルミーさんのままだから」

「……私は魔王だ、貴様は勇者だ！　それが理由ではないか

！」

ガサツ……

モンスター　スライムがあらわれた

「それがツ！　それが未練がましいって言うんじゃないか！

それがあなたの本心なのか、俺にはどうしてもそう思えないんだ！　魔王だ勇者だなんて捨てればいい、それが戦う唯一の理由だと言うのなら、俺はそんなもの断ち切ってやる。あなただって魔王なんてもの捨てちまえばいいんじゃないですか！？」

「黙れ、勇者ア！！」

「黙りません！　カルミーさん、魔王だとか勇者なんてくそ食らえだ、俺はあなたの事が……」

「黙れと言っている！」

カルミンツァーはデッドエンドコスモスを放った。強大な暗黒球がセインを塵も残さず貪らんと、一直に迫る。だが……

スライムのこうげ……

スライムは　　うっかりこうげきの　　しゃせんにはいった

”！！！！！！！！！！”

スライムは　　やみにむさぼられた

「なんだと!?!」

闇を割き、セインが飛び出した。もう、カルミンツァーの眼前
にて、拳を振りかぶる!

「.....」

「うおおおおおおおおおおー!」

セインは拳を振りかぶる。もう、回避もガードも間に合わないほど間近であった。

(しまっ……!?)

そのまま、振り抜くだけのセイン。が、彼はこの期に及んでも未だ……。

”セイン様、とおっしゃるのね。ふふふ、名前まであの人と一緒なのよ“

“私にはどうする事も出来ないけど、きっと明日も続くのね”

”セイン様にとって魔王は絶対的な悪なのですか?”

“あなたがやることで、誰かが癒やされるのでしょうか”

彼女の言葉は全て本物だったとするならば、そうして佇む彼女が本物だったとするならば……

「ッ!?!」

「何故、だ……」

セインの一撃はピタリと、カルミンツァーの文字通り目と鼻の

先に止まっていた。

「何故止めた勇者ア！　あと僅かがどうして踏み出せない、簡単な事だろオオ！」

あと一步、一步分の思考が失せたなら、圧倒的たる魔王に一発をくれてやれた。魔王カルミンツァー……只の街娘であったカルミン……何が違うのだ、と。

「俺は……こんなときに、馬鹿だ」

拳が、停止した腕がだらりと垂れる。かと思いきや、ほどかれた手と共に最後の一步を踏み出した。

「!?!」

終わって見れば結局勇者は、魔王を腕の中へと引き寄せていた。呆気にとられた魔王、実にあっさりと勇者のプレートメールに身を預ける格好となった。

「……何のつもりだ？」

「……えーと……す、好きです、魔王カルミンツァーさん……」

虫の羽音一つでもあれば掻き消えていたかもしれない声だった。鎧と衣服で密着していてもはっきりとは聞こえなかった。それでも、この奥手奥手な勇者は気のきいた言葉をすっ飛ばし言う。

「……だから？」

「も、もう止めましょう……あなたが、魔王であることを差し引いても、そのう、お釣りが来るんで、えっと……」

「勇者は国民と王と犠牲者皆の感情を背負い、魔王討伐に出掛けたのにか？　そんな自分が許したからいい、みたいな独善で魔王を生かす？　馬鹿げてるとは思わないの？」

「馬鹿げてますよ。独善なものも分かってます、けど……はは、こんな俺じゃあ勇者とはいえないでしょう？」

ああ、彼は勇者であることをやめたんだ。純粹に何を願うのか、それは多分そう言うことなんだろう。馬鹿だ、それもとびっきりの。

「馬鹿過ぎ……だが、私はそれも出来ない」

ドン、と押し返される勇者。攻撃のそれでないのはすぐに分かった。ただどほんの少し開いた隙間が、ずっと遠くに見えた。

「勇者セイン、最後の攻防だ。お前が死ぬか私が死ぬか二つに一つ、例外はない。助かりたければ私を終わらせろ……」

「待ってくれ、俺は……」

魔王の右手が鈍く輝く。この距離だ、損じることには有るまい。

「滅びろ、勇者アアア！」

魔王カルミンツァーはエクセキューションフィストを使用した。

ガサッ……

モンスター

スライムがこのタイミングにあらわれた

第九十七ゲル 無敵S VS くうきをよまない人々

スライムの こうげき

「!? セイン!」

カルミンツァーはこうげきをやめ セインのいちと いれ
かわった

バシィツ!

「きゃあああああああああああ!」

「カルミンツァーさん!? くそ またおまえかあ!」

バキッ!

”!!!!!!”

スライムをげきはした

「カルミンツァーさん、大丈夫ですか!」

「ぐう……どうして私は……いいや、嘘か。セイン、私はな、
本当は馬鹿になりたかったのかもしれない。魔王、と勇者でさえ、
最後の魔王らしさでさえ、本当はどうでも……」

「カルミンツァー……やっぱりあなたはカルミーさんだ!
どうしても、どうしても切り離せなかった」

「…………私もさ。本当は…………」

Bannon!

とびらがくだけ スライムのたいぐんがあらわれた

「…………セイン、魔王の願いで恐縮だが、私を置き去りにするか最後まで闘うか、この場で決めて欲しい…………もう私も馬鹿になってやるっ」

「分かってなかったんですか？ あなたを守ります、最後が来ても一緒にいます、出来れば結婚…………」

ヒュッ!

スライムのくつきをよまないこうげき

「うおっ!?! これからって時に!」

「後にしよう。無論、続きは聞かせてくれるんだろう?」

「ええ!」

セインのこうげき

バキッ! ドカッ!

“……………?”

スライムをげきはした

「私も、寝ている訳にはいかなあ！」

カルミンツァーは　　ディメンジョンホールをしようした

スライムは　　いじげんのあなに　　のみこまれた

“！！”

スライムのこっげき

ベチィ！

「があ……まだまだあ！」

バゴォ！　　ベキッ！

「はアアアアア！」

”！？“

「はあ、はっ……無事ですが、カルミーさん？」

「ああ。だが魔力が尽きかけた、そろそろマズイかもな。……
にしても」

ガサツ、ガサツ……

スライムの　ぞうえんがあらわれた

「減らん、こいつら」

「そう、ですね」

「セイン、どうせだ。さっきの続きを頼む」

「……遺言ではありません。そうでしょう？」

「ああ」

「では……カルミーさん、魔王と勇者でも関係ないです」

スライムのこつげき

「こんな俺とで良ければ、けっ……」

「ウオオオオオオオオオ！」

ズバツ！

“！！！！！！！！！！”

スライムをげきはした

「お前ら、よく生き延びた！

後は俺様に任せて貰おう！」

「『『セイン（セイン様）（セイーン）！！』』」

くつきをよまない勇者パーティーのメンバーが現れた。

「はは……は……」

セインは笑うしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2004x/>

無敵スライム

2012年1月6日18時56分発行